

〈ハリキ〉について

——漁民集団史研究のための覚え書——

小川 徹太郎

-
- | | |
|---------------------|----------------|
| 1 問題の所在 | 4 漁民集団史研究の視角 |
| 2 「現場の知」とは | 5 「非識字」者としての日常 |
| 3 「月給取り」と「自分の商売」の間で | 6 結 語 |
-

論文要旨

私は1984年の春頃から瀬戸内地方の主として広島県竹原市忠海町二窓，同県三原市幸崎町能地，同県尾道市吉和，同県因島市箱崎，同県豊田郡豊島で漁師や魚商のおじさん，おばさんたちと付き合いを続ける中で研究をすすめてきた。付き合いを続ける中で，私が身に染みて感じてきたのは，日々の生活を繰り返すことから生ずると思われる，仕事や生活に向かう際の構え方や語り口における迫力・底力のようなものである。本稿は，こうした迫力・底力のありかを，日常生活の断片と全体社会の構造との連関のうちに把握しようとする試みである。

漁師のおじさんたちによる漁労についての説明には，一つの主張がみられる。その主張の骨子は，「帳面」，「図表」を通じては「分かり」得ない「現場」の「分かり」方があるのだ，ということである。さらに，この主張からは，「帳面」を付けたり読んだり，「図表」を作成したり読んだりするものによる，あるいはそれらを通じて形成される社会の仕組みのうちにあることによって生じる，日頃自らが行なっていることへの「無理解」に対する批判や不信の念を読み取ることができる。

この主張の意味を捉えるには，一方でこのような「無理解」をもたらす仕組みに圧迫感を感じながら，同時にその一方で，その仕組に自らのもつ知識や技術では対応し切れない限界を感じざるを得ない，前も後もない緊迫した状況でなされていることがふまえられていなくてはならない。それ故，この主張の意味をさらに問うていくには，社会構造のうちに生ずる様々な圧迫とそれに呼応する形でなされる様々な対応の具体的諸相とその歴史的展開を解明しなくてはなるまいが，その際とりわけ，歴史・社会を形成していく推進力としての「開発」，「政策」の動きや仕組みに注目する必要がある。「開発」，「政策」のうちに獲得される知識や技術が「書かれたもの」以外の伝達手段とも連携しながら，上に触れた社会的なやりとりのみならず，具体的な社会関係における様々なやりとりにおいていかなる影響をおよぼしていくのが把握されねばなるまいし，漁民集団の形成・展開の把握もこの観点から可能となろう。